

---

# 唄を聴かせて

亜耶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

唄を聴かせて

### 【Nコード】

N8611J

### 【作者名】

亜耶

### 【あらすじ】

『白化病』という死に至る病が蔓延する灰色の世界 鈍色の雪が降り積もる世界には、『唄い人』と呼ばれる不思議な歌声を持つ存在があった。そんな世界で生きる、病に冒された青年ラズリと『唄い人』ルビイの行き着く先は。

## 前編

夢を見た。

父と母、そして妹との四人で、平凡だけど幸せに暮らす夢を。けれどすぐに夢だと気付く。そんな幸せは存在しないからだ。

気付いた時、この手は汚れていた。拭っても、拭っても、消えはしない罪で汚れていた。

だから、俺は

ちらちらと灰色の細かな雪が舞う中、数多くの露店が立ち並ぶ通りを、仕事を終えたばかりの青年、ラズリは歩いていた。目深にかぶられた黒いフードからは時折、青みがかった銀色の瞳と長い睫が覗く。

「その兄さん！ どうだい、安くしとくよ」

露店の中の一つを通りかかった時、品のない声が響いた。腹の出た小汚い親父が唾を飛ばしながら、店の前を歩くラズリに話しかけ

ただ。

親父は、にやにやと黄色い歯を剥き出しながら、歩き続けるラズリの隣にくつつき、後をついて来る。

「見てくだけでもいいからさあ。いいのが入ったんだ……」

しかしラズリは目もくれず、歩き続ける。そんな彼を強引に引き止めようとして、親父がラズリの纏うマントをぐいと引っ張ると、フードがはらりと落ちた。

そこから現れた青年の顔を見て、親父は驚愕する。なぜなら、現れたのは真つ白な髪の毛、色素の薄い肌、そして青みがかつた銀色の瞳だったからだ。そんなラズリの姿を見た途端、親父はマントを掴んだ手を勢い良く離し、その拍子に後ろに尻餅をついた。

「うわっ……何だ、『ハク』かよ。『ハク』がこんな所うろついてるんじゃないっ」

親父は振り向かずに通り過ぎていったラズリを口汚く罵った。

白髪をなびかせながら歩くラズリは、そんな親父に見向きもしなかった。また、親父も、彼の姿を罵るばかりで、それに気付く事はなかった。

とは言え、仕方のないことだったと言えた。それは彼の纏う黒いマントに、すっぽりと覆われていたのだから。

ラズリがたつた今終えてきた仕事の痕跡に、その親父が気付ける理由などなかった。

灰色の雪が降る世界　大地は年中灰色の雪に覆われ、その内側を見せることはない。

灰色の雪が降る所以を、世界に住む人々は知らない。雪が汚染された大気中を舞う間に、汚染物質が付着してしまうから、という一説が有力な説ではあるが、その真偽も定かではなかった。

それ程昔から、灰色の雪は絶えず降り続け、現在に至っているのだ。

灰色の世界には、ある病が蔓延していた。

死に至るその病の名は『白化病』。発症に至る原因は、世界に降り続ける灰色の雪のせいだと言われ、雪に含まれた成分が人体に悪影響を与えているという。

発病すればまず髪の毛や体中の色素が薄くなり、徐々に五感を失ってゆく。そしてやがては死に至る、そんな病だった。

人から人へ感染する事はない。しかし人々は死に至るこの病を酷く恐れ、発病した者を差別し、その真つ白な姿の異様さから『ハク』と呼んで蔑んでいた。

そして、そんな世界だからこそなのか、この世界には不思議な存在があった。

皆一様な姿で生まれ落ち、産声の代わりに、美しい唄声を発しながら生を受ける、そんな赤子の存在が。

そうして生を受けた者は『唄い人』と呼ばれ、奏でる旋律は世界に蔓延する病の進行速度を緩め、さらに健康な人間に対しては、病への耐性をつけるという不思議な効果があった。

しかし、そんな彼らの寿命は短かった。

その存在自体が特異であるが故に、心ない人間は、『唄い人』をある時はさらい、ある時は親元から金品で引き取り、更なる高額で必要とする人間と取引をして従属させる、そのような事が日常茶飯事として行われていた。

もちろん、そんな『唄い人』を救済する施設も存在してはいるが、その目をかいくぐり、違法を犯す人間は少なくない。

青年ラズリは、そんな暗黒の世界に生きていた。

「ただいま」

ラズリは白いドーム状の建物へ入るなり声を上げた。そのドーム状の建築物はこの世界に住む人々の一般的な住居であった。

降り続ける灰色の雪と、身に染みる寒さを防ぐ為にに適した素材で造られた数多くのドームが、この世界には多く存在している。

その時、ラズリの声に反応した何かの影が揺れた。

「ルビィ」

ラズリが呼ぶ。すると、ドームの奥から出てきたのは少女だ。

金の絹糸の様な髪をなびかせ、くりつとした海のように深い青色の瞳を青年に向けて、少女は微笑んでいる。肌はきめ細かく、ラズリほどではないが白く透き通っていて、着ている藍色のワンピースがよく栄えていた。

ラズリはかぶっていたフードを脱ぐと、そんな少女を見て小さく微笑んだ。

「いい子にしてたか？」

とたとたと軽やかな足取りで、ルビィと呼ばれた少女はラズリに走り寄り、飛び付くと、彼の顔を見上げ得意気に答えた。

「うんっ、ルビィいい子にしてたよ。外にも出てないし、唄だって唄ってない」

しかし、自らをルビイと呼ぶ可憐な少女の口から出た声は、その姿に似つかわしくないものだった。満面の笑みをラズリに向けたルビイの声は、まるで老人のように囁れていたのだ。

ラズリは、それを意に介する様子もなく、まるで甘える猫の様にすり寄るルビイの頭を撫で頷いた。そしてその手を引き、飯にしよう、と言い歩き出した。

「眠くなってきたあ……」

食事が終わって一時間程すると、ルビイは目をこすり、欠伸をし始めた。

それは毎日変わらない事で、その後寝室へ連れて行き、少女が眠るまで脇で添い寝をしてやる事も、毎日のラズリの日課だった。そうでなければルビイは眠れなかったし、彼もまた、少女の安らかな寝顔を見なければ安心できなかったのだ。

寝室の窓からは青白い月明かりが、すやすやと眠るルビイの顔を照らしている。月の浮かぶ灰色の空を眺めながら、ラズリは物思いにふけていた。

あと、どれくらい生きられるのだろう。自分が死んだら、ルビイはどうなるのだろう、と。。。

ラズリは白化病患者だった。

自分がそうだと気付いたのは、もう数年前になる。兆候など無かったように思う。

毎日見る自分の姿の微細な変化に気付ける者は少ない。まして家族のいないラズリが、早期に気付ける術など無かった。

そして、そうだと気付いた時には既に遅かったのだ。

ラズリは、少し伸びすぎている後ろ髪をつまみ目の前に持ち上げた。

細い髪の毛は真っ白で、昔の面影など無い。かつては、髪の毛目の色も、夜の闇の様に深い黒色だった。肌の色だって、健康とい

う言葉がよく似合う褐色だった。

それが今はどうだろう。ラズリの今の姿は、残された命の時間が僅かであることを表しているのだ。

ラズリは嘆息し、隣で寝息をたてるルビィの髪を撫でた。

安らかな寝顔は、初めて出会った時から想像できない。ましてや、笑顔などあの時は一瞬たりとも浮かべたりしなかった、とラズリは思い返していた。

青年が少女と出会ったのは一年前。その場所は見せ物小屋であり、青年の『仕事』の場所でもあった。

少女は『唄い人』として生まれた為に人買いに買われ、見せ物小屋で鎖に繋がれていた。

希少価値のある存在として見せ物とされていたその場所に、青年が通りかかったのは、決して偶然ではなかった。

青年の仕事は、『唄い人』とは切り離せないものなのだから。

「ひいつ、た、助けてくれ！」

耳障りな人間以下のクズの悲鳴。

何度同じような命乞いを聞き、何度耳障りな断末魔を聞いたことか。

同じ人間を人間として扱えない、世界に湧くほどにいるクズどもは、一掃しなければ。



「……お前は、同じ言葉を言った『唄い人』に、何をした」

傍らに横たわるのは、金の髪と白い肌を持つ少女の遺体。

その細い首には自由を奪う首輪がはめられ、体には暴行されたかのような傷跡が無数にある。虚ろに開かれた青い瞳には、涙が残っていた。

「や、やめ……………っ」

刃を振り下ろす。

迷いも、情けも、後悔もない。

それが、贖罪。

それが、俺の。

無音のドームで目を覚ました時、ラズリはそれが何度も見続けている夢であることに気付いた。

酷く汗をかいている。

ラズリは小さく嘆息した。この夢を見た朝は、いつもこうなのだ。額にじつとりと浮かぶ汗を拭い、窓の外を見た。曇天であることを差し引いても、空はまだ暗い。

しかしラズリは起き上がり靴をはくと、上着すら羽織らずに、灰色の世界へと繰り出した。

灰色の新雪に足跡を残しながら、ラズリは進んでゆく。薄手の服から伝わる体温で、雪は瞬時に溶けてしまっていたが、顔色ひとつ

変えない。

やがて後にしたドームが小さく見える位置まで来て、やっと立ち止まり俯いた。

「はは……」

漏れたのは自嘲するような、濁いた笑い。濡れた服が張り付いた肩が細かく震えていた。

「……寒さすら感じなくなるのか……」

ぼつりと呟く。

しんしんと降り積もる雪に余計な音が吸い込まれ、その声は暗がりの中、大きな存在感を持っていた。

眠るのが怖くなるのだという話を、聞いたことがあった。毎日症状が進むこの病を患う人間は、眠り次の目を迎えることを酷く恐れるのだ、と。

ラズリはその意味がやっと分かったような気がした。

人間の五感を失ってゆく死の病。やがて何も感じなくなってしま  
うのだ。喜びも、悲しみも、温もりも。

「……イヤだな」

ラズリは雪をその手に掴んだ。

何も、感じなかった。

冷たさも、その感触も、溶けて水滴となり流れ落ちていった感覚も、何も。

「……は……」

もう一度、渴いた笑い声を上げ、目を閉じる。瞼の裏に浮かぶのは、ちょうど一年前の出来事。

あの日、いつものように『仕事』をこなしていたラズリの目の前にいたのは、名前すら持たない少女だった。

見せ物小屋で鎖に繋がれたその少女への扱いは、酷いものだった。ろくに食事を与えられていなかったであろう体は、あばらが浮き上がり、粗末な服に包まれていた。そして無理矢理唄わされ続けていたのか、その少女の声は、老人の様に嘎れていたのだ。

血だまりに沈むかつての自分の所有者を、虚ろな眼で見据えながら、それでも唄うのを止めなかつた少女。

そっくりだ、とラズリは思った。

いや、似ているのは当然なのだ。その少女は、同じ存在なのだから。

けれどラズリにとってその少女は他の『唄い人』と比べて、何か違った。そしてその何かが、彼が失ったたった一人の妹の姿を彷彿とさせた。

ラズリは名もなき『唄い人』の少女を連れ帰り、名を与えた。

『ルビィ』 それはラズリの妹の名前。妹と同じ『唄い人』である少女に与えたその名を呼ぶことで、ラズリは自分の犯した罪を忘れないでいられた。

「……もう潮時かもしれないな」

小さくそう呟いて、ラズリは天を仰いだ。

その『仕事』は、贖罪だった。自らが犯した罪を知った時から、一生をかけてあがなわなければいけないと、己に課していた。『仕事』を終えるのは自分が死ぬ時だ、とそう思っていた。

しかし、『唄い人』である少女と出会いちょうど一年。守るべき

存在を得たラズリにとって、彼の続ける『仕事』は危険すぎた。  
己に課した贖罪。

しかし、その為にもシルビィを傷つけることになどなってしまったら、それはなんの意味も為さない。

「次で……最後にしよう」

その場所には、前々から目は付けていた。悪い噂を耳にしていたのだ。そしていつも通り確認に向かい、やはりそれが間違いないことをラズリは確信していた。

ラズリは踵を返した。

冷たく張り付く服を気にも止めず、ざくざくと雪道を歩き出す。戻るのではない。最後の『仕事』場と選んだ場所へ向かう為だ。

「最後に……あそこを潰す」

まだ夜も明けないうち、その親父は店の支度に勤しんでいた。それは違法の元、しかし確かに必要とされていた店だった。

今日は大入りを見込めるはずなのだ。いつも通り匿名ではあったが、親父の元には一通の封書が届いていた。それは、親父の店の違法な商品を取引する為の手段だ。

稀に見る高額だった。

決して親父がその値を提示したわけではない。よほど取引相手がその商品を物入りとしているか、金持ちの道楽であるかのどちらかだと、親父は踏んでいた。

どちらにしろ懐が温かくなることには変わりない。親父は口元が弛むのを我慢出来なかった。

封書に示されていた時間が近付いてきた時、親父は物音に気付いた。

ざく、ざく、と雪を踏みしめる音がするほうに視線を向ける。うつすらと影が見えた。

ほんのわずかな違和感を親父は覚えた。

酷く、華奢だ。

大抵は雪や寒さを防ぐ防寒具で、ある程度肉付きは良くなっている筈のだが、この店に向かおうとするその影にはそれが見られない。

しかし、親父はそんな違和感もすぐに忘れ、両手を擦りながら華奢な影を迎え入れようとした。もうすぐ大金が手に入るのだ。

「いらっしやいませ、あなたがこの封書の、か……た」

意気揚々と封書をかざした親父の語尾が詰まる。そのままその手からひらりと封書が落ちた。

「お、お前は……」

親父が一步後ずさる。

しかし向かう影の歩調のリズムは変わらない。ざく、ざく、と一定のスピードで親父に近付いてくる。

「ち、近付くな……っ」

親父が二歩後ずさる。

それと同時に激しく後悔をしていた。

つますぎる話だと思っていたのだ。まさか、まさか自分の身にこんな事が降り懸かるとは。

いや、よく考えれば、これこそまさに典型的な成り行きであ

ったのかもしれない。

知っていた筈だった。『唄い人』を扱った商売をする人間が何者かに殺害される事件が、ここ数年絶えずに起きていた事を。

その犯人の姿は誰にも知られていなかった。違法の取引ゆえ、立ち会つのはごく少数の人間だけであつたのに加えて、立ち会つた人間は例外なく全員殺害されていたからだ。

ただ、同業者が次々と殺されている、と風の噂だけが流れていた。

「……お前が、俺達の同業者を殺してまわっていたのか」

おののく親父の目の前に夜の闇を裂き現れたのは、酷く儂げな青年。この寒さに似つかわしくない薄着で、白い息を吐きながら青年は足を止めた。

「お前は……今朝の『ハク』だろ」

青年 ラズリは、ふつ、と笑つた。それは肯定の笑みだった。

しかしただ一度会つただけで覚えているとは思つ。同時にやはりこの姿は酷く目立つ、とも。

「な、何が目的だ？ 金か？ 『唄い人』か？ それならタダでいい……金はいらぬ」

ラズリが一步進む。親父は一步後ずさる。

「なあ、た、助けてくれよお。こんな事でもしねえと、食いつぱぐれちまうんだよ……」

不敵な笑みを浮かべたラズリは、何も喋らない。目の前にいる醜い人間とは言葉を交わす気にもならなかつた。

ふと親父の向こうに視線を送る。

開け放たれた店内に檻が見えた。その中に捕らわれているのが『唄い人』である事を、彼は知っている。

ラズリは笑みを消し、ざりと歯軋りをした。

「なあ、見逃してくれよお」

恐れおののくあまり、親父は足をもつらせ尻餅をついた。酷く青ざめ、絞り出した様な震える声で懇願する。

「……………」

そんな親父を冷ややかな目で、ラズリは見下ろした。

「俺だつて、こんな商売やつちやいけねえ事だつて分かってるさ。で、でもなあ、必要とされてるんだ……分かるだろ」

『ハク』であるお前なら、と言おうとして、止めた。いや、続ける事が出来なかった。

ラズリはいつ間にか鋭く光る刃を手にした。その滑らかな切っ先を目にしながら、ラズリの鋭い眼光に射抜かれた親父は震え上がった。

「……殺さないで、くれよ……」

もうその言葉は聞き飽きたと言わんばかりに大きく嘆息し、ラズリは腕を振り上げる。

そして言葉も発せず、その腕を振り下ろした。

何の躊躇も、迷いもなく。

灰色の雪に、鮮血が飛び散った。

辺りには鉄錆の様な臭いが充満している。しかしラズリは既にそれを感じる事は出来ない。それは彼にとって悲しい事実ではあったが、この『仕事』の時だけは、感謝出来る事でもあった。

ラズリは血塗れの刃を雪で拭くと、これ見よがしに開け放たれた店内へと向かった。そこにある酷く小さな檻。そしてその中に閉じ込められていた『唄い人』の少女。膝を抱え埋めていた顔を上げたその大きな瞳には、涙が浮かんでいた。小さく細い肩が、か細く震えている。

「もう、大丈夫」

出来るだけ優しい笑みを浮かべて言うと、ラズリは刃を逆手に持ち、檻を閉ざす南京錠を強引に壊しにかかった。甲高い金属音に『唄い人』の少女の肩が、びくりと跳ねる。

錠はいとも簡単に壊れ、錆び付いた音と共にゆっくりと開いた。かかんだままラズリは檻の中に向け手を伸ばす。少女は青い瞳に不安げな色を浮かべ、困惑していた。

「おいで」

大丈夫、ともう一度優しく言う。

その声に安堵したのか、少女はゆらりと立ち上がった。小さな檻で立ち上がれるくらいの背丈の、まだ年端もいかない『唄い人』。少女はそのままかけより、ラズリに抱きついた。

そんな少女の頭を撫でながら、ラズリは胸が痛むのを感じた。それは病のせいではない。

間近で見る少女の体には、沢山の傷が刻まれていた。どれほどの痛みと、恐怖と、孤独をこの小さな身で受け止めていたのだろう。ただ『唄い人』として生まれてしまったというだけで。



「……ごめんな」

小さな頭を撫でながら、呟く。

少女は何も聞こえなかったのか、ラズリの体にしがみついたままずっと顔を埋めていた。

「ごめんな」

もう一度そう呟いて、ラズリは灰色の天を仰いだ。

それは届くはずなどない言葉だった。それでも言わずにはいられなかった。胸の内、根を生やしたかのように消えることのない後悔を、少しでも紛らわせたくて。

ただの自己満足だと分かっている、それでも。

## 中編

分かっていた。

ぜんぶ、分かっていたよ。

その白い手を伸ばされた、あの時に。この人は、そうなのだ。けれど、だめなの。

この声じゃ、だめなの

「な……っ！」

ラズリはその場に立ち尽くし、声を上げた。それは人買いの元から救い出した『唄い人』の少女を、保護施設に送り届けた帰りのことだった。

うつすらと遠目に見える我が家。その扉が、開け放たれている。ざわりと胸騒ぎがした。嫌な予感が頭をよぎり、ラズリは駆け出した。

建物の目の前までやってきて、ラズリは嫌な予感が的中した事を悟った。開け放たれたままの扉は、酷くいびつな形にねじ曲がり、扉としての用途を果たしていない。それは明らかに人為的であった。壊れたドアをくぐり、足を踏み入れたラズリが見たもの。それ

は惨劇の痕。散乱した家具や衣服、破壊された椅子が、辺りに転がっている。

「ルビィ……！」

転がる椅子を蹴飛ばしながら、ラズリはルビィの眠る寝室へと向かった。鼓動が早まる。頼む、いてくれ。そんな思いだけがラズリの胸に広がっていた。しかし、それは呆気なく崩された。

「ルビィ！」

『仕事』に出る前まで、確かにそこで寝息をたてていた場所に、ルビィはいなかった。

それが己の意思ではないことは明らかだ。シーツや毛布は乱れ、あるうことか枕は裂け、中の綿が出た状態で床に転がっていた。

「ああ……！」

なんてことだ。

けれど、分かっていたはずだった。

ただでさえ、『唄い人』は狙われやすい。離れるべきではなかったのだ。

目眩がした。激しい後悔が胸に渦巻く。

「くそっ！」

あとはもう静かに生きようと決めたのに。残りわずかな時間を、共に過ごそうと決めたのに。

それとも、初めからその手を離せば良かったのか。他の『唄い人』

と同じように、すぐに施設に預けてしまえば良かったのか。  
そうすれば、こんなことには。

「……ルビィ……俺はまた……」

ガクリと膝を折り、呻くように呟いた。

『ルビィ』 それは名も無き『唄い人』の少女に与えた、ラズリの妹の名。幼い頃に失ったたった一人の妹の名だ。

しかし、幼き頃に信じていた事実は、両親の死の際の言葉に覆された。

幼い頃、ラズリの住む貧しい集落を流行り病が襲った。子供ばかりがかかる病で、当然のようにラズリも高熱に三日三晩うなされ、生死の堺をさ迷うこととなった。そして幼い妹は同じ病に冒され、高熱に耐え切れず死んだと両親に告げられた。それはあまりに突然で、呆気ない別れだった。

その数年後、両親は白化病で死んだ。その際、ラズリに真実と後悔の念を告げる。これは報いなのだ、と。娘を金と引き換えに売ってしまった罰なのだ、と。

真つ白な手で見えない目から流れる涙を拭う両親の言葉は、ラズリにとって青天の霹靂だった。つまりは、貧しい家族四人が暮らすには生活はあまりに厳しく、たった一人の妹は、幼いあの頃に人買いの手に渡ってしまったのだ。

ラズリは、その時理解した。

自分が今生きていられるのは、『唄い人』である妹を犠牲にしたからなのだ、と。真実を得て決意した贖罪。

生きる為に犠牲にってしまった妹のかわりに、同じ『唄い人』を救うこと。自己満足にしか過ぎないけれど、ラズリにはそれしか方法が見当たらなかったのだ。

「くそ……っ！」

ドン、と床を激しく叩く。

自責の念と怒りが入り混じるその心の内を、そのこぶしに込める。

人さらにさらわれた『唄い人』の辿る道は一つだ。心ない人間に買われ、家畜以下の扱いを受け、喉が潰れるまで唄わされ、そして死んでいく。

ラズリの脳裏に、ルビイの顔が浮かんだ。恐怖に歪み、声も出せないまま涙を流す、そんな少女の顔が。

同時に浮かぶもう一人のルビイ。その少女は打って変わって、海のように深い青色の瞳で、自分を睨みつけている。それは妹の姿だった。

「ルビイ……っ」

思わず叫ぶ。それと同じくして、脳裏に浮かんだ二人のルビイは消えた。

続く言葉を口内に残したまま、ラズリは唇を噛みしめた。さらわれたルビイの行方など皆目見当もつかない。彼には、ただ無事を祈るしかない、それしかないと思われた。

その時だった。

「や……やったぞ。これで、大金持ちだ！」

灰色の雪原を、一人の痩せた男が駆け抜けていた。くまで縁取ら

れた目をぎよるぎよると動かし、辺りを窺うようにして走るその姿は酷く異様だ。加えてその腕には、一人の少女が抱えられていた。

「さっさと売っちまって早いとこずらかるう」

その男は酷く小心な人間だった。そしてそれを補うかのように小賢しかった。

「へへ……思わぬ収穫だ。『ハク』が『唄い人』を匿っているなんてな」

男はこそ泥だった。ラズリに目を付けたのは、昨日のことだ。

通りを歩いていたマントを羽織ったその青年は、商人に絡まれていた。噂では違法な取引　つまりは、『唄い人』を売買すると聞いていたが　をする商人に見向きもしない青年の被るフードが、偶然脱げたところを、この男は目撃したのだ。

白い髪と白い肌を見て、男はその青年の病状がだいぶ進んでいると踏んだ。そして後をつけたのだ。予想は的中し、青年は男の気配にも気付くことなく、家路へと着いた。

そこからはこの男の根気との勝負だ。

やがて日は落ち気温もぐんと低下したが、男はそれを耐え青年が外出するのを待った。

不在になるのを待つのであれば、それは健康な者であろうと、白化病の患者であろうと変わらないように思われるが、小心な男はいざという時に逃げやすいように、体力の低下した出来るだけ病状の進んだ白化病である人間を選んだのだ。それが、ラズリだった。

「はあっ、はあっ……」

ここまで来れば平気だろう、と小さく呟いて男は走るのを止めた。

ずいぶんと走った。これならばたとえあの白化病の青年が気付いたとしても追えはしまい。

自然と笑みが漏れた。明日からは、豊かな生活が待っている。そう考えただけで、嬉しさが込み上げた。

しかし、男はただ逃げることに精一杯で、気付かなかった。

自分の抱える『唄い人』の少女の手から、少女の着る藍色のワンピースの切れ端が、点々と雪原に残されていたことに。

「あれは」

それに気付いたラズリは、素早く駆け寄った。

視界にぼんやりと映り込んだそれは、藍色の布の切れ端。ラズリにはその布が何であるのか瞬時に察知した。

「これは、ルビィの……」

気に入り、毎日のように着ていたワンピースだ。その切れ端が落ちている。

ラズリはそれを手に取り、顔を上げた。そして、それまでは気が動転していた気付かなかったが、同じ切れ端が家の入り口にも一枚落ちていることに気付く。すぐに駆け寄り手に取ると、ラズリは祈るような思いで、歪んだ扉をくぐった。眼前に広がる灰色の雪原。

ラズリは目を凝らし、細める。

「……………!!」

灰色をわずかに彩る藍色。

視力の衰えた彼にとって、それを視認することはひどく困難なことだった。しかし、ラズリには、それはルビイの元までの道のりを照らす希望の光のように、眩しく感じた。

ラズリは患っていることを感じさせない勢いで、雪原を駆け出した。

ちらちらと、舞い落ちる灰色の雪。

転々と残された布の切れ端を追ううちに、天気は見る間に崩れていった。日中であるにもかかわらず、空は暗く気温は下がる一方だ。雪の粒も細かい。

焦る気持ちを抑えながら、ラズリは一瞬でも止まることなく走り続けている。

もし、その容姿が見えなければ、人は彼が白化病であるとは思わないだろう。実際この時、ラズリ自身病のことを忘れていたのかもしれない。ルビイを救いたいという強い思いが、彼の体を奮い立たせていたのだ。

「……！」

そのかいもあり、ラズリは前方をのろのろと歩く男を見つけた。

その腕には、ここに至るまでに追いつけていた、布の切れ端と同じ色の服を着た子供が抱えられている。

それがルビイであると直感的に確信し、ラズリは懐から鈍く光る刃を取り出した。それと同時に叫ぶ。

「ルビイー！！！」

その雄叫びに、男が振り向いた。その表情が歪む。



目を疑った。

それは、紛れもなく昨日男が目を付けた青年だった。氣候に似つかわしくない薄着で現れたラズリは、恐ろしく鋭い眼光を浮かべ、男に向かい突進してくる。白い髪と白い肌が、灰色の雪原を背に酷く浮き立って見えた。

「ひ、ひいつ……！」

情けない声を上げ、男は踵を返す。逃げなければ、そう思ったのだ。

しかし年甲斐もなく先程まで全力疾走していたことと、子供一人分の重さが、男の足をもつれさせた。男は、雪に足をとられその場に倒れ込んだ。同時に、それまで抱えられていたルビイの体は放り出された。

「ルビイ！」

それを見逃さず、ラズリはルビイの元へ駆け寄ると、倒れ込んだ小さな体を抱き起こし、その名前を呼んだ。

「ラ……ズリ……」

幸いなことに、ルビイは怪我一つしていなかった。そのことに、ラズリはほっと胸をなで下ろし、その体を抱きしめた。

「良かった……良かった……！」

「苦しいよお、ラズリ」

ああ悪い、と言ってラズリは腕を解いた。ルビイの頭を撫で、微

笑む。それに応えるように、ルビイも満面の笑みを浮かべた。

「ごめんな、怖い思いをさせて。早く帰ろうな」

ルビイの小さな手を取り、立ち上がるうとしたその時、異変が襲った。

「……………」

瞬間的な激しい頭痛とともに、視界が一段と暗くなり、ラズリは思わず片膝をついた。こめかみを押さえ、ぐらぐらと揺れる視界に目を開けていることすら叶わず、目を閉じる。

それは、白化病の症状が進んだことを意味していた。

「ラズリ……………」

突然崩れたラズリを心配に思ったルビイが覗き込んだ。その青い瞳は不安の色が浮かんでいる。

「……………」

目を閉ざした暗闇の中だというのに、ラズリに襲いかかった目眩は、まだ続いている。暗闇すらも回り、平行感覚を失った体を支えるのに、彼は心配するルビイに大丈夫だと告げる余裕さえ失っていた。

「ラズリ、だいじょうぶ？」

嗚れた声で呼びかけながら、ルビイはラズリの肩に触れた。そのあまりの冷たさに一瞬身じろぎし、いつそう不安げな表情を浮かべ

る。

「ラズリ、さむいの？」

そう尋ねるルビイの声は、ラズリの耳には酷く遠くに感じる。遠く、暗闇に反響する声に応えようと、彼はやっと口を開いた。

「……大丈夫」

それは嘘ではない。

ラズリは寒さを感じていなかった。少女の小さな手の温かさすら、感じることも出来なかったのだ。自分の体がどれほど冷え切っているのかも、分かってはいなかった。

「大丈夫」

言い聞かせるように、もう一度口を動かし、立ち上がった。若干足がふらついたが、何とかそれをこらえ、そして目を開ける。

しかし、そこにあつたのは暗闇だった。

ラズリは言葉を失った。

開けているはずなのに、何も見えない。小さな手の、温もりすら感じない。しんと静まり返った暗闇に届くのは、どこか遠くで響くルビイの声だけ。

焦点の定まらない瞳を見開いたまま、ラズリの手が空をかく。そしてやっと隣にいたルビイの体に触れると、その体を引き寄せた。

「ルビイ、ここにいな？」

「ラズリ……？ ルビイはずっとここにいなよ」

存在を確かめるように抱きしめ、その手がルビイの頭を撫でる。

「周りをよく見て……お前を連れていこうとした男はどこにいる？」

「うーん。あれ、いなくなってる？ ラズリ、あの人がどこか行っちゃったよ」

「そうか」

その言葉を聞いて、ラズリは胸をなで下ろした。

恐らくは逃げたのであるろう。もし人を殺めることに躊躇いを感じない人間であるならば、対峙した時点でそのような行動に走る。それがなく、気付いた瞬間に逃げ出そうと踵を返したのは、あの男が予想外に小心であつたからだ。

本来なら追いかけて仕留めるのだが、今はその状況をありがたく感じた。

ラズリは、自分の状況をよく理解していた。今自分がすべきなのは、ルビイを安全な場所へ移動させることなのだ、と。

「ルビイ」

抱きしめていた小さな体を離し、ラズリは目の前で心配そうな顔をする少女の名前を呼んだ。

「ルビイ、お前がここまで落としてきたコレ、見えるか？」

ラズリは懐を探ると、一番最初に拾った藍色の切れ端を取り出した。それをルビイに分かるよう目の前でひらひらとかざす。

「これを辿れば家に着く」

ルビイはラズリのそんな言葉をきよとした様子で聞いていた。その言葉の意味が分からなかったわけではない。そんなことを聞くことの意味が分からなかったのだ。

「着いたら俺の部屋に行くんだ。枕元にメモが置いてあるから、とりあえずそれを見てくれ。施設までの簡単な地図が載ってる」  
早口に言葉を紡ぐ。

それはいつか来るこの日の為に用意していた言葉だった。まさかこんな場所で言うことになるとは思っていなかったのだが。

「しせつ……？」

途端にルビイの顔が曇る。そして首を横に振った。

「しせつって？　ねえラズリ、いつしよにお家に帰ろう」

「……………ルビイ」

ルビイの囁れた声は震えている。そのことにラズリも気付いていた。しかし暗闇で遠く聞こえるその声に、応えることが出来ないことも、分かっていた。

この状態で一緒に帰るのは得策ではない。時間もかかる。何より、共に行けたとしても、この状態のラズリに少女を守る術はないのだ。それならば、と思う。一人で行かせたほうが小回りがきく。足手まといになるよりは、そのほうがいいのだ、と。

「…………施設にはお前の仲間が沢山いる。みんな仲良くしてくれるさ。あそこの施設長もいいヤツだから、その身ひとつで行ったって、お前の助けになってくれる」

それは危険な賭けかもしれない。  
この道に、先のような悪行を考える人間がいなとも限らないのだから。

「俺のマントが部屋に出しっぱなしになってるはずだから、それを羽織っていくんだ。フードまでしっかりかぶるんだぞ」

「ラズリ……」

震えた声が、ラズリの名前を呼ぶ。一緒に行こうよ、と小さな手が彼の服の裾を掴んだ。

「ルビィ」

その声を振り払うように、ラズリは声を張り上げる。ルビィの肩がびくりと小さく跳ねた。

「行くんだ。振り返らず、走って」

ラズリにルビィの表情は見えない。けれど、容易に想像することは出来る。

酷なことを言っていると思う。幼いルビィに、たった一人でこの広い雪原を歩かせようとしているのだから。

けれど降りしきる雪が切れ端を覆ってしまったら、それは終わりを意味する。行ってもらうしかないのだ。

「さあ、行くんだ」

細い肩を押す。突き放すように言い放ち、ラズリは俯いた。

しかしルビイは動こうとしない。懸命に首を横に振りながら、青い瞳に涙をため、じっとラズリを見つめていた。

「ラズリ……ルビイひとりじゃ帰れないよ」

ルビイは手を伸ばし、自身のわずかに冷えた手でラズリの頬に触れた。

「一緒に帰ろうよお……」

それは今にも泣き出しそうな声だった。

その声に、ラズリは胸を締め付けられるような思いに駆られた。ごめんな、と心の中で詫びながら、もう一度声を張り上げる。

「行け、ルビイ！」

雪原にその声は酷く大きく響いた。

その声にルビイの顔がくしゃりと歪み、たまっていた涙がぼろぼろと落ちた。ラズリの頬に触れていた小さな手がゆっくりと下ろされる。

「……すぐにむかえに来てね」

振り絞るような声を出し、ルビイは踵を返した。

「……分かった」

その声に応えて、ラズリは微笑んだ。

「すぐに迎えに行くよ、ルビイ」

待ってる、と付け加えたその声を背に、ルビィは走り出した。  
一度も振り返ることなく、ただひたすらに、走り続けた。



## 後編

あなたは、頑張つて。

そうすればきっと、いつか、救われる日がくる。

だから、後悔しない道を選んで。

私は、後悔なんてしていないから

一人の少女は、雪原を疾走していた。親のような存在である青年の言いつけを守り、一度として後ろを振り返ることなく、一心不乱に走り続けていた。

点々と雪に埋もれかけた布の切れ端。それを追い続ける少女、ルビイの脳裏には、あの日　ラズリに救出される前の出来事を思い出されていた。

珍しい動物や、迫力のある芸を仕込まれた子供、そして希少価値の高い『唄い人』を各地で見せてまわっていた、名もない見せ物小屋。

そこには、本来ならこの年頃の子に与えられる愛情の類など、一つもなかった。だから知らなかったのだ。そして、知らなかったからこそ、疑問にも思わなかった。そこでの生活が、人としていかに

無情であったかも、自分がどれほど愛情に飢えていたのかも。

「唄え！ どうした、早く唄うんだ！」

身なりの整った男の罵声が飛ぶ。周りで芸の練習をしていた鎖で繋がれた子供達の視線が、同じ場所に向けられる。そこには一つの檻があった。

「じほつ、……声が、出ませ……ん」

酷く掠れた声が辺りに響く。それと同時に声の主は大きく咳き込んだ。

「何だと！」

怒気を含んだ声で叫びながら、男は手にしていた鞭をしならせる。

「唄えないだと？ 馬鹿を言うな！ いいから唄うんだ！」

男は顔を真っ赤にしながら、鞭で檻を打った。鈍い金属音が轟く。それから耳を逸らすかのように、子供達は自らの芸に打ち込み始めた。誰かが犠牲になっっている間、自分達は平穩を得ることが出来る。子供達は本能でそれを知っているのだ。

そしてそれは最近毎日のように繰り返されていることだった。

「無理……です。」「ほっ」「ほっ」

檻の中で咳き込むのは、『唄い人』だ。年の頃で言うなら十五、六歳くらい、外見だけ見れば十分に成熟した、美しい『唄い人』だった。その傍らにはまだ幼い『唄い人』が震えながら隠れていた。

「唄え！ 唄うんだ！」

男は知っていた。

『唄い人』の寿命は短い。成人する前に、大抵の『唄い人』は死んでしまうことを。

『唄い人』は金の卵だ。確かに元手はかかるが、この商売はそれの何倍もの収益を得られる。なくてはならない商売道具なのだ。

加えて、男がここまで躍起になるにも理由があった。寿命の近い『唄い人』の変わりとなる新しい『唄い人』。檻の隅で縮こまり震えている少女に問題があるのだ。

「くそつ、最悪だ！ 死にかけと粗悪品じゃ、どうにもならん！」

高い金をはたいて買った新しい『唄い人』は喉を痛めた粗悪品だったのだ。なぜきちんと確認しなかったのか悔やまれたが、すでに遅かった。

「……………はあ、はあ……………」

大きく咳き込み崩れる『唄い人』を見下ろしながら、男は大きく息を吐いた。

「ルビィ」

狭い檻の中で、胸を大きく上下させ呼吸する『唄い人』の傍らで、少女がぼつりと呟いた。それは今まさに命を終えようとしていた『唄い人』の名前だった。

少女にとって年長であるルビィは、姉であり母親でもあった。声が囁れた少女は、見せ物小屋の主に辛く当たられることも多かったが、そんな時も彼女は身を挺して庇ってくれたのだ。

「ルビィ」

もう一度呼ぶ。

その声に、ルビィは時間をかけて息を落ち着かせ、微笑んだ。

「私……もう、終わり……みたい」

ルビィの白く細い指が、少女の頬に触れた。少女の深い青色の瞳には涙が浮かんでいる。

「……でも」

はらりと落ちた滴を拭い、ルビィは続けた。

「あなたは、頑張って……。そうすればきっと、いつか、救われる日が……くる」

「ルビィ……」

少女の顔がくしゃりと歪む。

そんな少女の細い体を、同じく細い腕でルビィは抱き寄せた。

「だから、後悔しない道を選んできた」

あの時あふることが、唯一の道だったから、とルビィは小さく呟いた。それはまだ彼女が幼い時に選んだ道。貧しい家族を救うために自ら進んだ、今に至るまでの道のり。

「ルビィ……？」

少女の呼びかけは、すでにルビィの耳には届いていなかった。そして、虚ろな瞳を虚空に向けて、ルビィは微笑み呟いた。

「……お兄ちゃん……」

母親を失った少女が、母親の言葉通り救われたのは、その三日後のことだった。

そして名前を与えられる。

ルビィ、と。

ぴたりと、ルビィは足を止めた。あの時間かされた言葉を頭で反芻させながら、同時に口に出してみる。

「こづかい、しない道」

ますます雪は激しくなっていた。早くしなければ、布の切れ端が雪に埋まってしまうことも、時間の問題だった。

距離で言えば、ルビイはまだ半分も踏破してはいない。立ち止まる隙などないはずだった。しかし、少女はここにきて初めて後ろを振り返った。

「ラズリ……」

促されるままに、一人雪原に残してきた青年の名前を呟く。

行け、と声を荒げた青年。それはこの一年間の生活の中で初めてのことだと言えた。けれど、その時のラズリの目と同じ目を、ルビイは見たことがある。

姉であり母親でもあった『唄い人』ルビイの死に際の瞳。それと同じだったのだ。

ルビイは踵を返し、走り出した。

それは青年ラズリへと続く、後悔しない為の道のりだった。

「……おかしなものだ」

ラズリは呟いた。

本来なら極寒であるはずの世界で、温度を感じることが出来ないのは、随分と不思議だった。

雪の上に横たえているにもかかわらず、冷たさを感じるこのないラズリにとって、それはまるで羽毛の詰まった布団のように柔ら

かく感じられたのだ。

しかし、体は寒さにかじかみ思うように動かない。仕方なく、ラズリは静かに体を横たえていたのだった。

「もう、着いただろうか」

ぼつりと呟く。

無事家に辿り着き、施設へ向かってくれていればいいのだが。

暗闇の中、辛うじてまだ生きている聴覚は、激しい風音を聞き取っている。それだけで、今の天候は容易に想像することが出来た。

実際、ラズリが家を飛び出した時点よりも、天候はだいぶ荒れている。

目印は埋もれていないだろうか、この風に吹き飛ばされていないだろうか、そんな思いが巡ったが、動くこともままならない今、ただ無事着いてくれることを祈るばかりだった。

「……今眠れば、死ぬな」

先程から絶え間なく襲ってくる睡魔に、ラズリは独りごちた。

日々病状が進行することから、白化病の患者は眠ることを酷く恐れると言う。しかし、ラズリのこの状況で眠ることは死に直結することを意味していた。

「ごめんな、ルビィ。もう俺は、迎えに行けそうに……ない」

見えない瞳に浮かぶのは、ルビィの泣き顔。迎えに来てね、と涙を流す少女の顔だ。

「ごめんな、ともう一度呟く。意識はすでに朦朧としていた。その時だった。

呟れた声が、暗闇に響いた。それは　ルビィの声。

ラズリは、ふふ、と自嘲気味な声を漏らした。

「……幻聴だけは、はっきり聞こえるんだな……」

もうその機能すら果たしきれていないと言つのに、ラズリの耳ははっきりとその声を聞き取った。

聞こえるはずが、ないのに。

ルビィはここから逃がしたのだ。そろそろ家に着いていてもおかしくないだろう。そうして施設に向かうのだから。

だとすれば、これは願望なのだろうか。

「……はは……」

笑いが込み上げた。

ここにきて、ラズリは恐怖を感じていた。死ぬことが、こんなにも恐ろしい。ルビィの面影にすがってしまうほど、こんなにも。

混濁していく意識の中、ラズリは呟いた。

「……………ルビィ」

降りしきる雪の中、幾分類を紅潮させ、ルビィは雪原に立ち尽くしていた。ぼろぼろになった藍色のワンピースをぎゅっと掴み、肩を上下させながら、白い息を吐き出す。

「ラズリ……！」

降り積もった灰色の雪の合間から見えるのは、どこまでも白い青



年　　ラズリだ。

ルビイは屈み、小さな手を真つ赤にしながら、ラズリの体の半分以上を覆う雪を掻き出した。雪は若干ではあるが弱まっていた。しかし冷え切った二人の体を埋めていくには十分だった。

それでもなお、ルビイは諦めなかった。倒れたまま、ラズリの手を取り力の限り強く握り、掠れる声でその名前を呼び続けたのだ。

やがて、あれほど激しかった風雪は止み、辺りには静寂が訪れた。そこには、ラズリの姿も、ルビイの姿もない。

鈍色の雪は、そこにあつた全てのものを覆い尽くしていた。

酷く息が苦しい。

そんな思いで、青年は意識を取り戻した。思わず咳込むと、幾分か呼吸が楽になる。目を開けると依然として、暗闇ばかりが広がっていたが、意識を失う前の朧げな記憶から、彼は今、自分が置かれている状況を思い出した。

「生きて、る……のか」

死を覚悟した筈だった。暗闇の中、かすかに聞こえた幻聴にすぎり、息絶えるのだと、そう思っていた筈だった。

それなのに、なぜ　　そう心の中で呟き腕に力を込めた瞬間、どさりと音がした。その音を、ラズリの耳は確かに捉えた。

彼は、それに触れた。視覚を失ったラズリがそれが何であるのか

確かめる術は、それしかなかったからだ。  
そして、息を飲んだ。

「……………」

その手に触れたもの　それは、雪などでは決してない。その形を、輪郭を確かめる為に、彼はその何かを腕に抱きしめる。  
その輪郭を、ラズリは知っていた。

「そんな、まさか」

思わず、自分の記憶を疑う。  
知ってはいけけないのだ。この場所にいるはずがないのだから。  
しかしそんなラズリの思いと裏腹に、それを強く抱きしめれば抱きしめるほど、確信してしまう。それが誰であるのか、思い知ってしまう。

「嘘だ……………」

どうして。

どうして。

どうして。

ただそれだけを繰り返す。

言った筈なのに。振り返ってはいけないと、確かに。

「ルビィ……………っ！…！」

ラズリの咆哮が、鈍色の雪原にこだました。  
その時、ルビィの紫色に変わった小さな唇がわずかに動いた。

「ラズリ……」

静まり返った雪原で絞り出される、かすかなかすかな声。しかしそんなルビイの声は、ラズリの耳には届かない。冷え切った少女の体を抱き涙を流す青年が、その少女の声に気付けるには白化病の症状は進行しすぎていたのだ。そしてルビイもまた、体を動かす力もないほどに、衰弱しきっていた。

「ごめんね……、いいつけ、やぶって……」

体をぐったりと横たえたままのルビイの青い目から、涙がこぼれた。しかし頬を伝い落ちる涙に、ラズリは気付かない。

「でも、『ルビイ』に……言われたから。あきらめないで……」

弱々しい声でなおもルビイは言葉を紡ぎ続けた。それは悲しい記憶の断片に残る、彼の人の言葉。諦めないでと微笑んだ、母でもある自分と同じ名を持つ人の言葉。

小さな唇から白い吐息が漏れる。

霞む視界には、自分を抱く青年ラズリの姿が微かに映った。

「ラズリ……ごめんね。ルビイの声じゃ、だめなんだ……」

救い養ってくれた白い青年。彼が病を患っていることは、ルビイにも分かっていた。

何度試してみたことだろう　眠るラズリの耳元で唄うことを。

それでも青年の病状の進行に変化はなかった。病はどんどんラズリの体を蝕んでいったのだ。

「ルビイの唄じゃ……だめなんだ」

粗悪品と罵られた記憶が脳裏を巡る。

唄い始めた途端、表情を曇らせ野次を飛ばした見世物小屋の客達。鞭で打たれた体は痛くて、喉は限界で。けれどそれを訴えることも許されなくて。

そんなところから助け出してくれたのは青年ラズリに他ならなかった。

「ラズリを、たすけられたら、良かったのに……」

溢れる涙は誰の手にも拭われることなくこぼれ落ちた。息も絶え絶えに絞り出されたルビイの声は、静寂に包まれたその場所であってもなお、雪に吸い込まれ消えていく。

消えた言葉は、願い。

それは容易なものであるはずだった。たとえ彼が既に白化病を発症した後であったとしても、正常な唄声であれば進行は最小限に食い止められたはずだった。けれどそれはルビイの囁れた声では決して叶わない、途方もない願いだった。

それでも諦められなかった。

もしかしたら、と。

「ラズリ……もう一回だけ、ルビイの唄……聴いて」

ルビイは目を閉じた。

あの日、伸ばされた白い手を思い出す。反射的に唄おうとしたルビイの頬をそつと撫でたその手。もう唄わなくていいのだと告げた優しい声。細められた青みがあった銀色の瞳。

「……………」

紫色の小さな唇がわずかに開いた。そこからかすかにこぼれるのは、旋律。生きるために声が囁れるまで唄ってきた唄。しかしその声はそれまで以上に囁れ、自分自身にすら届かないほどに弱々しいものだった。

それでも懸命に少女は声を絞り出した。これが最後だからとでも言うように、その唄に、その声に、全てを込めた。

やがて、その唇から音のない空気だけが吐き出されるようになってたその時、ルビイの頬に温かい雫が降ってきた。

「……帰ろう」

ラズリはルビイの体を抱え立ち上がった。視界は依然として闇に包まれている。しかし意識を失う前に感じていた目眩は消えていた。

「帰ろう、俺達の家」

一歩一歩足を踏み出す。降り積もった鈍色の雪に足をとられ、幾度となくよろめきながらも、ラズリは進む。その方角が合っているかも分からず、ただひたすらに歩き続けた。

すでに日は高く昇っていた。しかしラズリにはそれを知る術はない。ざくざくと足音を鳴らしながら歩を進めたその雪原には、一人分の足跡がどこまでも続いている。

ふと、耳に残る旋律を口ずさんでいることにラズリは気が付いた。脳裏に浮かんだその旋律はひどく懐かしい、そんな思いに駆られるものだった。

初めて手を差し延べた時、ルビイは唐突に唄い始めた。見世物小

屋での教育によるものであることはラズリにも分かっていた。噎れた声で唄われた拙い旋律　それはあまりに痛々しく残酷な現実だった。だから言ったのだ。もう唄わなくていいのだ、と。もう唄うな、と。それは約束でもあった。

たった一度だけ聴いた唄　その唄をラズリは口ずさんでいた。まるでもう何度も聴いたことがあるかのように、一音一音をはつきりと覚えていることが不思議だった。

思わず目頭が熱くなった。見えない目から涙が溢れる。喉が詰まった。

「……………」

結局これは自己満足でしていた行為の結果なのだ。そんな分かった事実がラズリの脳裏に浮かんでいた。そして分かりきっているからこそ、激しい後悔が胸に渦巻いた。もし家を空けていなければ、もしもっと早くこの仕事を辞めていれば、もし始めから施設に預けていれば　。

ラズリは涙を止めることが出来なかった。彼の頬を伝って落ちた雫は、ルビィの頬に落ちていく。ぽたぽたと止めどなく落ちていくそれは、まるで雨のようにルビィの顔を濡らした。

その時、少女の目がかすかに開いたことに、彼は気付かなかった。

「……………ルビィ」

堪え切れず立ち止まり、ラズリは腕に抱える少女の名を呼んだ。髪を撫で、涙を流したまま見えない眼で天を仰ぐ。

「ごめんな……………」

それは謝罪の言葉　今まで救い出してきた『唄い人』にかけてきたその言葉を、最後に救えなかった腕の中の少女に捧げた。

ルビィにラズリの声はすでに届いていなかった。涙を流す彼の悲痛な表情も見えなかった。それでも少女は、微笑んだ。笑みを浮かべたまま、音のない唄を唄い続けた。

ラズリの耳にもまた、その唄声は届いていなかった。ルビィの笑顔も見えなかった。そして彼は、再び唄い始めた。唄いながら、歩を進めた。

やがて、唄声は消えた。

鈍色の雪原に長く続いていた足跡も途切れた。その途切れた足跡の先にラズリは倒れていた。その腕には抱き抱えられたままのルビィの姿もある。

ラズリはかろうじてまだ生きていた。しかし彼の体は、ついに限界を迎えていた。歩き続ける力はおろか、起き上がる力さえも彼には残っていないかったのだ。

「『ハク』だ！」

そんな彼に投げ掛けられた言葉は、その姿を侮蔑する声だった。ラズリは首を持ち上げその声の主を見上げる。

「おっ！ そいつは『唄い人』じゃねえか。ん……死んでるのか、ちっ、使えねえな」

そこにあつたのはそれなりの身なりをした太った男の姿だ。その背後にはごんまりとした建物がある。男は下品な笑みを浮かべラズリを足蹴にしたかと思うと、ルビイの髪を掴み上げ、死んでいると分かると乱暴に放った。

「どけどけ！ 商売の邪魔だ！ さて、買い主はまだか……」

男は封書を手にし、落ち着かない。その顔面はニヤニヤと緩みきっている。

ラズリは見えずとも確信していた。皮肉なものだと思う。もう最後と決めていたはずなのに、それでも彼にはそれを見過ごすことは出来なかった。

腕に力を込め、懐にしのばせた刃の柄に触れる。起き上がる力はない。だからこそ力を振り絞り、声のするほう目掛け刃を放った。それは見事に男の体に突き刺さり、短く呻いて地面に倒れ込んだその巨体は、ぴくりとも動かなかった。

「……やったか」

しかしラズリもまた、動けなかった。全ての力を使い果たし横たえた体には、もう何の力も入らなかった。その虚ろな瞳に映ったのは、開け放たれた建物の奥に置かれた小さな檻。その中にいるのはやはり『唄い人』の少女だった。

少女は格子の間からラズリを見つめていた。突如として現れた白い人間に戸惑っていたのかもしれない。それでもやっと状況を理解したのか、少女は立ち上がり格子に駆け寄った。ガチャガチャと金



属音を鳴らし、檻から出ようとその方法を模索する。その音はかろうじてラズリの耳に届いていた。

「ごめんな、もう動けないんだ……」

彼は暗闇の先にいるだろう。「唄い人」の少女にもその言葉を告げた。この仕事は全う出来そうにない　意識さえ、もう失ってしまっ  
いそうだった。

「情けないな……やっぱり最後はこんなザマだ。ルビィ、俺を恨んでるだろう……。俺と一緒に過ごしたこと、後悔してるだろう……」

鉛のように重くなった腕で、ラズリはルビィの亡骸を探す。その指先がルビィの腕に触れ、そして小さな手を探し当てた。その手を掴みラズリは目を閉じると、そのままどろみに身を委ね、今度は二度と覚めることのないだろう眠りにつこうとした　その狭間で、彼は唄声を聴いた。

近く、遠く、響く唄声。

それはルビィの声によく似ていた。いや同じ　そのものだった。少なくとも、今まさに眠りに落ちようとしていたラズリにとっては。

「……唄、声……」

夢か現か、ラズリには区別はつかない。だからこそ眼を開けた先にあつたその姿に目を見開いた。

「ルビィ……？」

そこにはいつもと同じ笑顔を浮かべたルビィがいた。金系の髪を揺らし、お気に入りの藍色のワンピースを着た少女は、海のように深い青色の瞳を細め楽しげに唄っていた。その声は囁れていない。

「ルビィ」

ラズリは立ち上がると、少女の元に駆け寄りその体を抱きしめた。その小さな体は温かい。そしてその時にやっと、彼は目や耳はもちろん全ての機能が正常な働きをしていることに気付いた。

「ラズリ」

青年の腕からひよっこりと頭を出し、名前を呼ぶ。

「ルビィはラズリのこと恨んでなんか、ないよ。それに後悔だつてしてない」

その声にラズリは顔を上げた。しかし目の前にいたのはルビィではなかった。

金系の髪と海のように深い青色の瞳、そして藍色のワンピースを着てラズリの正面に立っていたのは、『唄い人』。けれどその姿はおそらくルビィより十は上だろう。それは美しい、優しい笑みを浮かべた『唄い人』だった。その唇が、動く。

「私も、後悔なんてしてないから　ね、お兄ちゃん」

その『唄い人』が放った言葉にラズリの心臓は跳ね上がった。  
今、彼女は何と言った？

彼女は、まさか　。

「ルビィ……っ!？」

しかしそう叫んだ瞬間には、すでにルビィは少女の姿に戻っていた。

「……ルビィ、だったのか？」

「ラズリ、ラズリ」

小さく呟いたラズリの服の裾をルビィが引く。慌てて彼は笑みを向けた。少女の頬はほんのりと紅潮しているようだった。

「ねえ、ルビィの唄を聴いて。ねえ、ラズリ」

「唄を？」

ルビィは懇願するようにラズリを見上げる。ラズリはすぐに答えることが出来なかった。痛々しい嗚れ声が耳に蘇る。けれど同時に、先程の楽しそうに唄うルビィの笑顔が脳裏に浮かんだ。

ラズリは、ゆっくりと頷いた。

「ルビィね、ずっとずっと、ラズリに聴いてほしかったの」

それはルビイのただ一つの願い。  
込み上げる涙を堪え、口を開く。その声を旋律に乗せ、何度も唄  
い続けた唄を唄う。

優しい音色に包まれたその場所で、ラズリはその唄に耳を傾けた。  
それはずっと聴いていたくなるような、優しく不思議な旋律だった。

「……聴かせてくれ、ずっと」

唄声を邪魔しないように、ラズリはそっと囁いた。

鈍色の雪がしんと降りしきるある日、一人の『唄い人』の少  
女が人買いの元から保護された。

檻に閉じ込められていた少女は、唄を唄っていた。救出されたそ  
の後も、唄うことを止めなかった。

それは人買いの店の前で眠るように死んでいた白化病の青年と、  
同じく眠るように死んでいた同胞に向けられた鎮魂歌だと人々は噂  
したが、その真相は誰も知らない。

了

## 後編（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます！

感想・ご指摘等いただけたら嬉しいです（ここまで読んでいただけただけでも大満足ですが）

それでは、また次回作もよろしくお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8611j/>

---

唄を聴かせて

2010年10月9日03時21分発行